人間環境学コロキウム2023報告書

文責：縄田佳志（行動システム専攻健康・スポーツ科学コース修士2年）

はじめに

近年、新型コロナウィルスの感染拡大により、オンライン授業やリモートワークが急速に推進されました。コロナウィルスが5類感染症に移行し、対面の授業が再開したり、働く人は会社へ出社したり、リモートワークと出社を組み合わせるハイブリッドワークをするなど様々な領域でポストコロナ時代のニューノーマルが到来しています。また、Chat GPTなどの登場により、シンギュラリティ（技術的特異点）の到来が近いとも言われています。現代は変化が激しく、これまでの当たり前が当たり前ではなくなることは容易にありえます。この様な現代に生きる私たちだからこそ、改めて「共生」について考える必要性が高まっていると考えます。

本コロキウムでは、学生や教員が一堂に会し「共生」という共通のテーマについて、講演やグループワークを通じて理解を深めることを目的としました。

概要

テーマ：「今、改めて共生について考える」
開催時期：2023年8月1日（火）13:00から16:00
場所：イースト1号館E-A239

実行委員会

人間環境学コロキウムの実行委員会は、2023年3月22日に発足しました。
実行委員は、専攻やコースが異なり、社会人大学院生も含む多様な背景を持つメンバーで構成されています。

実行委員会メンバー		
都市共生デザイン	アーバンデザイン学	De Silva Randima Sewwandi
	都市災害管理学	阿部 空弥
人間共生システム	臨床心理学指導・研究	岩瀬 さくら
	共生社会学	山田 真理子
行動システム	心理学	服部 楓
		重永 日向子
	健康・スポーツ科学	森本 弘太
		縄田 佳志（実行委員長
教育システム	総合人間形成システム	鎌田 宜佑
空間システム	建築計画学	徐 錫東
	建築環境学	上原 光太
	建築構造学	目野 稜真（副実行委員長）
実践臨床心理学		栗脇 開生
担当教員		松尾 真太朗
		南部 恭広

企画立案等の過程は、アジェンダに応じてオフラインとオンラインを使い分けてミーティングを行い、効率的に企画を進めてきました。

企画会議を進める中で、「共生」という言葉の定義の幅広さや、共生を考えるためには対義語に相当する「分断」についても考える必要性が議論となりました。また、具体的に何との共生を考えるべきかについても意見が分かれました。

これらの検討課題を考慮し、コロキウムの冒頭で、参加者間の共生に関する理解を揃えるために、共生という言葉の定義だけでなく、その歴史や時代による変遷についても話していただくことにしました。また、何との共生を考えるかについては、あえてテーマを絞らずに参加者の考えを発散させるため、ディスカッションワークで各グループごとにテーマを決め、課題と解決策の社会実装について検討してもらう形式を採用しました。

当日のスケジュール

本コロキウムでは、二人の講師による講演とグループワークを実施しました。

講演1:「共生とは何か」

講師:飯嶋秀治先生
（九州大学大学院人間環境学研究院　人間共生システム専攻　人間科学部門　教授）

飯嶋先生の専門分野は共生社会システム論、文化人類学、宗教学、民俗学、臨床心理学など多岐にわたり、各現場での実践および研究を展開されています。

飯嶋先生は、参加者間で共生の定義や理解を揃えるために、共生の字源や仏典翻訳、英仏独語翻訳、日本語のみでの用例、領域と課題について話されました。

講演2:「いとしま免疫村の取り組みについて」

講師:池田美奈子先生
（九州大学大学院芸術工学研究院　未来共生デザイン部門　准教授）

池田先生の専門分野は情報編集とデザイン史であり、ユーザー感性スタディーズプロジェクトとして、学外の企業や自治体、民間団体などと共同で、社会的な課題解決を目指す現実のプロジェクトを重視されています。

池田先生には、共生や共創をビジョンに置き、実際に社会実装に取り組まれている『いとしま免疫村』の事例を紹介していただきました。快適な都市型生活環境が慢性炎症性疾患の原因になっていると言われる中、未病の段階で発見し対処する必要性、社会実装の重要性、そして免疫村のアイデアについて話されました。実践されている方から取り組みを通じた気づきや課題など生の話を聞くことで、大学院生として研究活動のその先にある社会実装を想像して日々の研究活動を行うことの重要性が伝えられました。

グループワーク

グループワークは3部構成としました。

グループワーク前半

共生をテーマに身の回りで関心のある社会課題(人×◯の共生に限定)について学生どうしで話し合い、1つの課題に焦点を当てる。
時間：20分

グループワーク後半

前半で決めた社会課題を解決するためにどの様なアクションプランが必要かを話し合い、最終的にプレゼンテーションを行う。ここでは、大学院生に限らず、行政や地域の住人など、立場は自由に設定して良いとします。
時間：20分

プレゼンテーション

プレゼンテーションでは、
①焦点をあてた社会課題
②なぜ、その課題を解決する必要があるか
③立案したアクションプランについて
④アクションプランの有効性
⑤そのアクションプランを遂行するうえで懸念点をまとめてほしい
(到達できる範囲でOK)

写真.当日のグループワークの光景

参加者の反応

本コロキウムには、人間環境学府の大学院生や教員、また学部生1名を含む約40名の方に参加いただきました。

コロキウム後に実施したアンケートでは、以下のような感想や評価が寄せられました。

- 他の専攻やコース生とディスカッションできる良い機会であった。
- 共生という言葉を当たり前に使っているが、ここまで真剣に考えることはなく、身の回りに視点を向ける良い機会になった。
- ディスカッションが盛り上がり、時間が足りなかった。

参加者からのフィードバックからは、異なる背景を持つ参加者間での活発な議論が行われ、共生について深く考える機会となったことがうかがえます。一方で、ディスカッションの時間が不足していたという意見もあり、今後の改善点として検討が必要です。

成果と課題

コロキウムを通じて得られた学びや気づき

本コロキウムを通じて、個人が関心を持つ共生のテーマや課題解決方法は多様であり、それは育ってきた環境や文化、専門性の影響を受けていることが明らかになりました。参加者の専門性の違いにより、物事を見る視点も異なり、興味深い意見が多く出されました。テーマを決めずにディスカッションを行うことで意見の発散ができた一方、班としての意見集約の難しさも観察されました。今後は、プレゼンテーション時のアウトプットのアウトラインを指定するなどの工夫が必要だと感じました。

当初の目的に照らし合わせた達成度の自己評価

実行委員会で設定した本コロキウムの目標は、共生をテーマに身の回りの課題に目を向け、解決方法を自分ごととして考えるきっかけを提供することでした。また、受動的な学びだけでなく、自らの意見や見解を示し、他者の意見を聞いて自分の考えを見直すなどの能動的な学びを促すことも目指しました。グループワークの様子から判断して、これらの目標は達成されたと考えます。

次年度以降の改善点や新たな取り組みの提案

次年度以降の改善点として、広報期間を十分に確保し、早期から学生への案内を行うことで、より幅広い対象層の参加を促すことができると考えます。また、講演時の質疑応答では、フォームなどを導入して発言が苦手な人でも質問しやすい環境を整え、ディスカッションの活性化を図ることが望ましいと感じました。

おわりに

人間環境学コロキウムの実行委員長として、まず、多忙な中、本コロキウムの運営に尽力してくださった実行委員の皆さん、松尾先生、南部先生、そして講師の先生方に心より感謝申し上げます。また、貴重な時間を割いてご参加いただいた皆様にも御礼を申し上げます。

本コロキウムのメインテーマは「今、改めて共生について考える」ことでした。私個人としては、「自分の意見や考えを自ら発信すること」、「その先の社会実装を想像すること」を裏テーマとして設定していました。そのため、これまでのコロキウムとは異なり、グループワークを設定し、時間配分も多く設けさせていただきました。

不確実性が増す現代社会において、いかに共生し、馴染んでいくかが重要だと考えています。本コロキウムがきっかけとなり、参加者の皆様が日常生活の中で共生について思い返し、身の回りに目を向ける機会となれば幸いです。

最後になりましたが、本コロキウムの開催にご協力いただいた全ての方々に重ねて感謝の意を表するとともに、今後も人間環境学コロキウムが発展していくことを祈念しております。